

『神にふれたとき』というのはいずれもそれらと題である。こういう題の記事は、読む側も何か劇的なことを期待して読むのではなからうか。

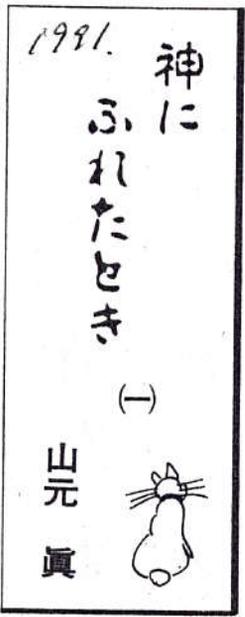
しかし、神にふれることは決して大げさなことではないと思う。私たちの信じている神は、インマヌエル。

「私たちがともにおられる神」である。だから、私たちはいつも神にふれていると言える。「ふれている」というより、「神とともにいる」といった方がより正しい。問題は、どういふ時に神を意識したか、である。

劇的なことは何もなかったと言えないし、また、ある意味では、すべてのごとが劇的であった、ということもできるであろう。「まこと」／＼園長先生の声がする。タバコを買いに行く。いつも決まっている。「しんせい」である。当時は園児にもタバコを売ってくれていた。いつも、

おつりがくるようにお金をもらっていた。五円だと記憶している。(最近確かめたら二円だったが。)そのおつりは、そのままお駄賃になった。その時、思った。「やさしい人だな」。

司祭職との「縁(五円)」



の修道院で黙想をした。十年前のごときである。この時、すばらしい神父に出会った。恥ずかしいことだが、このとき初めて自分の心を開いた。その神父が言った。「今、君は自信を持って司祭になっていいよ。赦された喜びを知っている人が、心から他人を赦すことができるのだから」。

の始まり。

「神にふれる時」は、よく分からない。後になってそれが「神にふれた時」と気づく。そんなものではないか。

神は私たちに直接ふれることはない。誰かを通して、何かを通して、出来事を通して、ふれてくださる。叙階式の前にトラピスト

ただいた。ローマ・ミラノ間は六百キロほど離れていて、移動は結構苦しかった。日本人会から呼ばれて初めてミラノに行ったときのこと。

一人の米国の婦人が、日本語ミサの直前に香部屋に来て、「ゆるしの秘跡」を求めた。英語が少しでも分かる司祭を捜していたぞうだ。ミサ後、告白を聴いたが、後で考えてみると、神は「この人のために私をミラノに呼んだ」のではないかと思える。たったそれだけのことがと思われるかもしれないが、その人を通して、神は、私とその人にふれてくださった。そう思ったことは、よくあること。

神は、いつも、そっと、ふれてくださる。

場合、「神が、神の方が、ふれてくださる」のではないだろうか。イタリヤにいたとき、一時期、ローマとミラノの日本人会のお世話をさせてい

歴 一九五三年福岡県生まれ。小倉教会助任を経て、今年四月より、福岡教区事務局長就任。

略

赤ん坊の眼を見ると、もうだめ。神がいらないなんていえなくなる。

いのちが生まれる。赤ん坊はいのちそのもの。その無垢、か弱さ。生命力、希望。そのほほえみ、まなざし、かほり。すべてが真理で、そのままの世界。こんなに純粹な世界が他にあるだろうか。赤ん坊に偽りはない。神は真理で、神に偽りの世界である。

赤ん坊にふれるとき、私たちは神にふれる。神はいのちを生む。母親もいのちを産む。神と母親の何と近いことか。

子供ができる。喜ぶ母親。悩む母親。産もうか、産むまいかと悩む。産めたら産むにこしたことはない。しかし、産めない事情もいろいろある。そこで悩む。

一番目、二番目のこともはまだいい。ただ、三番目、四番目になると、はな

しがかわってくる。一番目の命も三番目の命も何ら変わりはないのに、順番の序列が命の序列になってしまふ。かくして、選択の自由がどこでも適用されてしまふ。「いのちを殺す自由」が、もっともらしく語られ、こうして殺人が正当化される。

だれも殺したくないのに

1991 神に  
ふれたとき



山元 眞

いのちを産むものだから。こともを墮ろすか、墮ろさないか、と相談を受けることがある。苦しく、胸がつかまる思いである。模範回答は決まっている。産むべきである。しかし、現実にはそんなものではない。簡単ではない。そして、理論で相談を受けるとき、べつ

はな

時が過ぎる。ずっと沈黙のまま。黙ってしまふ。

沈黙の次に出てくるのは祈りである。沈黙の中から祈りが出てくる。二人とも強く祈っている。「力を下さい」と。

相談を受けるとき、まず十分に聞く。そして、次にかを一生懸命話そうとするのだが、うまく言えない。最後は祈りになる。聖堂に行っても祈る。しばらく沈黙して、そして詩編69から続けて静かに祈る。「神よ、わたしを救ってください。……」

殺してしまふ。

に考えが変わるわけではない。回答は分かっている。

理論はみんなわかっている。それなのに、どうして殺してしまふのだろうか。墮胎をするかしないか、その悩みは想像を絶する。

これは、当事者でなければ分からないだろう。その苦しみは、神と当事者、特に女性にしか分からないのではなからうか。神も、女性も

祈りのあと、「産みます」という声を聞くと心底から喜びがわいてくる。必ずしも、すべての人が「産む」という結論は出さない。しかし、この時、確かに神はふれてくださる。そばにいて、いっしょに苦し

はなからうか。神も、女性も

はなからうか。神も、女性も

ローマでの留学を終えてカナダにいた時の出来事。

メキシコ行きの飛行機の中で。となりに座った婦人が私に話しかけてたくてウズウズしている。疲れきっていた私は、ダンマリを決め込んでいた。

トロントを発って三十分。「日本人の方ですか」。会話が始まるいつものパターン。「何をされてるんですか」。次には決まってこう聞いてくる。

「カトリックの神父をやっています」。私はいつものように答える。自己紹介もなしに話が進んでいく。

「教会法の勉強って、何をされるのですか」。いろいろあるけど、特に結婚の問題を扱います」というと彼女は急に真剣な顔になって言った。「じつは、私は離婚していて、今は息子と暮らしています。カトリックは離婚はゆるされないのでしょうか？私はカトリックではないけど、神父様が結

婚問題を勉強されたのなら、離婚したり、結婚問題で悩んでいる人の『ナマの

声』をぜひ聞いて欲しいわ。机の上の勉強だけじゃなくして」。そういうと、彼女は自分の過去を話し始めた。

結婚した当初のこと。その時の気持ちとその後の感情の変化。家庭の問題。夫のことなど。どうしようも

教会法の勉強は神学校で終わりと思っていたが、どうやら、一生の付き合いになりそうなのがする。はつきりいって、あまり面白い

学問ではない。最初は、いやいやながらやっていたが、留学中も、そして、日本に帰ってきてからも、離婚や再婚など、結婚問題で悩んでいる多くの方たちと

神に

ふれたとき

(三)



山元 眞

するのが、幸せへの近道なのだろう。

司祭になることを望み、自分なりの司祭像を持っては来たが、神の望みとは、どこかズレがあるようだ。教会法には興味もなく、好きでもなかったのだが、もともと司祭職などは、興味や趣味で生きるものではなく、それぞれの、そこそこの必要にかられて生き方が決まってくるものだと、やっと思えるようになった。

「神にふれること」それは「人にふれること」であり、「人の必要に応えること」が「神の必要に応えること」になる。弱く、貧しい人とかかわることは、弱く、貧しくなられたキリストとかかわることになる。

離婚、再婚、その他結婚問題で悩んでいる方からよく言われること。「教会はいつまで私たちのことを放っておかれるのですか」。神にふれる機会を逃してはならない。

ない現実。離婚以外に解決の道はなかった。そのことに後悔してはいない。その責任は自分がとらなければならぬこと。などなど。

教会法は神学校で学ぶ科目のひとつ。あまり人気がない。自分も好きではなかった。司祭叙階の一年後、司教から呼ばれて、教会法を学ぶようにいわれた。

人生、人の生き方は、自分の思い通りに行くものではなく、また、自分の思い通りにしようとすると、無理が生ずる。人生は神の思い通りに行くものであり、また、そのようになろうと

赤ん坊の眼をみると、もうだめ。人間とは、こんなにも純粹で美しいものかと思つてしまふ。

たくさんの人がいる。まわりいろいろな人がいて、その中に自分がある。人はだれも自分のいのちの「初め」を知らない。その終わりの「とき」も知らない。その後のことも知らない。

神がつくられたものは、すばらしい。人も、動物も、植物も、自然のすべてがすばらしい。神がつくられたこのすべてのものを通して、私たちは「神にふれる」ことができる。

人間のみが、その創造主を意識することができる。人間のみが、自分と他の存在の意味を問いかける。自分のいのちの「初め」を知らないが、それだけに、それが与えられたものであることに気づく。神から造られた「ほやほやの」いのち。赤ん坊は神の分身であり、だからこそ、彼は私

ちに感動を与え、彼を見る私たちに、彼の造り主である神に触れさせてくれる。

この大切な大切な神の作品(?)を育てることが人に任せられている。

どこにも「悪い子ども」はいる。しかし、それは、ある範ちゅうと照らし合わせて決まることであつて、

であつて、それが悪いはずはない。育てる私たち、環境が悪いのである。間違えるとか、失敗することは、人

間だから当然ある。残念だが、人間は誤りながら、学習していく。だから、赦(ゆる)すこともできるし、ま

た赦さなければならぬ。子どもを叱るのは難し

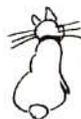
る。そうして子どもを傷つけた場合、その傷はずっと後まで残ることになる。

子どもを叱つて、何度か泣かしたことがある。叩いたり、恐怖で泣かしたので

はない。一緒に、そのことが「悪かった」かどうかを考へていくうちに、悪いとわかり、そのときに泣き、反省する。その涙は美しい。

# 神に ふれたとき

(四)



山元 眞

1991

子どもそのものが悪いといえないのではなからうか。たとえ子どもそのもの

が悪いように見えても、ではなぜ、そうなったのか、と問いかけてみると、子ども自身に責任があることは

少ないと思う。まわりの責任が多い。子ども(人間)自身は神から造られたもの

い。明らかに子どもが悪いように見えても、そうでない場合や、それなりの理由があることもある。できれば叱る前に、子どもに聞いてみたい。その上で、言いかせ、叱つても遅くはない、子どもとの出会い、人

間かせ、叱つても遅くはない、子どもとの出会い、人

り、怒つたりすると、えてして判断を誤ることがあ

「子どもたちが私のところに来ることを妨げてはならない」。赤ん坊との出会い、子どもとの出会い、人

との出会いは、間違いない、子どもとの出会い、人

場になる。

(終)